



FALCON

はたらく地理学

－GISソフトウェア開発会社勤務者の視点から－

※2015/3/28 発表資料を一部改編

株式会社ファルコン
坂上寛之

1. 学生時代の経歴

- ◆ **学部：**河川、特に自然環境の保全・復元
といったテーマに関心
 - ◆ 卒業論文では河川敷の河道の変遷と植生の関係を調査
 - ◆ 当時、建設省（当時）の行っていた事業
「多自然型川づくり」などに関心
 - ◆ 問題点：「望ましい」河川環境とは何か？ ?->環境は断念
- ◆ **修士：**「防災」であれば「環境」よりは
目的は明確（と当時は思った）
 - ◆ 修士論文：水害に関するハザードマップの
作成を、地理の技術・成果を活かした視点で

2. 就職後の経歴

- ◆ GISソフトウェア開発会社に就職
 - ◆ 「ソフトウェア開発」が主業務
 - ◆ 入社時、プログラミングの経験はJavaとHTMLの基礎程度
- ◆ 入社2年目からの3-4年
衛星画像の解析関連の研究開発
 - ◆ 衛星画像の解析で樹種分類ができないか？
(林業分野での実利用の検討)
 - ◆ GISとリモートセンシングで有名な某大学の研究室で修業
 - ◆ 自分の修士論文の技術レベルの低さを痛感

2. 就職後の経歴

- ◆ 衛星画像の解析で樹種分類ができないか？
 - ◆ 研究としては一定の成果
 - ◆ 問題点：条件の良い画像でなければ
実用に耐えうる解析結果は出せない
＝解析結果の質を保証できない
 - ◆ 目的としていた用途での実利用化は困難
- ◆ その後は通常の開発業務にシフト
 - ◆ 主にOGC（Open Geospatial Consortium）
の標準規格に則った相互運用のWebGISの開発



3. 地理学で学んだことが活用できていると感じる点

- ◆ 衛星画像の解析をしていた頃
 - ◆ GISソフトを用いたデータ加工などのスキル
- ◆ 業務がWebGIS開発にシフトしてから
 - ◆ GISソフトを用いたデータ加工関連のニーズは減
 - ◆ 頻度は低いが今でも役に立つことはある
 - ◆ プログラミングとの併用でより効率良くできるように
 - ◆ システム関連のスキルの比重大
 - ◆ ソフトを「利用する」側ではなく「作る」側

3. 地理学で学んだことが活用できていると感じる点

- ◆取引先の方々との会話で
 - ◆地誌的な知識を活かして会話の切り口に
 - ◆相手に応じた配慮は必要
 - ◆みんなが地理マニアな訳でない
- ◆ハザードデータに関する知識
 - ◆土地条件図など地形に関する情報の説明
 - ◆ただし頻度は少なめ

4. 実社会で感じる地理学の特徴

◆ おおまかな傾向として・・・

◆ 地理（履修者の学生）：個人プレイ

- ◆ 各人の興味関心のある対象を研究テーマにできる
- ◆ 卒論などは（基本的に）1人で調査を進める

◆ 実社会：チームプレイ

- ◆ 組織全体で大きな目標
- ◆ その目標に向かって各メンバーの役割を細分
- ◆ 基本的に指示命令系統がある

4. 実社会で感じる地理学の特徴

	個人	チーム
メリット	- 好きなことを自由にできる（自己責任） - 能動的に動けるようになる	- 組織全体で大きなことができる - 適材適所の分担で効率良く
デメリット	1人でできることには限界がある - 大きなことができない - 独善に陥りやすい	- 指示待ち・受け身の状態になりがち - チームワークが乱れた時の影響大

防災のような学際的な事象に取り組むのであれば
チームプレイが適している？

5. 地理学を実社会で活かすためには

- ◆ 学問としては・・・
 - ◆ 文理融合
 - ◆ 人間と自然の関わりを総合的に扱う
- ◆ 実際の地理学履修者
 - ◆ 個人によって異なる多彩な専門分野
 - ◆ 問題点：地理学履修者ならこの業界、
というロードマップは示せない
 - ◆ 地理学履修者全員に共通しているスキルとは？
 - ◆ 地図？空間？考え方？
 - > 専門分野に縛られないスキルは漠然としている印象

5. 地理学を実社会で活かすためには

- ◆ 専門分野を活かす以外の視点で
 - ◆ 地理学を学ぶ上で自分の適性・特性を把握し、それに合った職種・業種を目指すという選択肢
- ◆ そんなに簡単・単純ではないと思うが、例えば…

適性・特性のあるスキル	職種・業種例
聞き取り調査	営業
データ分析	研究・コンサルタント
プレゼンや指導	教育
巡検や勉強会、打ち上げの幹事	企画
作図やポスター作成	デザイン
ウェブ作成やプログラミング	IT（GISに限らず）

5. 地理学を実社会で活かすためには

◆防災に関して

◆ハザードマップの作成

- ◆広域で定量的なもの->地理向きではない？

- ◆問題点：シミュレーションによる想定は
条件設定次第でいかようにもできてしまう

- ◆ビッグデータは計量地理的手法で扱える？

- ◆よりミクロなスケールでその地域ならではの情報を盛り込む

- ◆街歩きによるハザードマップ作りなどの支援

- ◆問題点：地域が小さいと、必然的に予算規模も小さい

- ◆目的に応じて、必要なハザードマップは多種多様

- ◆問題点：末端の開発者のすることには限界がある

- ◆仕様の策定から関わりを持って盛り込みたい観点を反映？

5. 地理学を実社会で活かすためには

◆防災に関して

◆ハザードマップの利活用

- ◆作るだけでなく活用する側の視点も持つ
- ◆ハザードマップの概念、捉え方、読み方などを、総合的に教育できないか？
- ◆災害の事後調査を未来の防災に活かすには？？？

◆ハザードマップ作成・利活用における 他分野との連携

- ◆地理の役割：目標設定と役割分担
 - ◆どのようなハザードマップを作成するか？
 - ◆どのように利活用していくべきか？
- ◆各分野の利点を活かす視点：適材適所の役割分担



FALCON

ご清聴ありがとうございました

※本発表は一会社員の少ない経験に基づいた
個人的見解です。ご了承ください。